

『古い考えの家』で生まれた20代ゲイ男性のナラ ティヴ

田中，将司
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/4774161>

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 12, pp.41-46, 2021-03-15. 九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター
バージョン：
権利関係：



『古い考えの家』で生まれた20代ゲイ男性のナラティブ

田中将司 九州大学大学院人間環境学研究院

要約

性指向でマイノリティの当事者理解に多くの質的研究が行われてきたが、当事者の複雑性を捉えるためにより個別性の高い研究が行われる必要がある。本邦でも1人の当事者を対象としたナラティブ研究がみられるが、先行研究との比較が行われておらずどの程度個別の語りであったか明らかでない。本研究では新たにゲイ男性(A)にインタビューを行い、そのナラティブと先行研究を比較しながら、自身の性指向をどのように意味づけているか、個別的に理解しようとした。その結果、先行研究では説明の難しい複雑な性指向への語りが得られた。その語りが生成された影響として、『古い考え』の家に生まれ結婚を『期待』されたことが考えられた。Aのその語りはアジア文化圏の特徴(Fukuyama & Ferguson, 2000)と類似していた。その『期待』に應えることは『ゲイ』自認を持つAにはネガティブに影響を与えるが、その文化のもとで生まれたAにはポジティブに影響を与えるため、評価や態度がまとまることなく複雑になったと考えられる。文化の影響について述べた当事者研究は本邦でほとんどなく、個別性の高い語りであった可能性がある。更なる当事者研究の蓄積が必要であるだろう。

キーワード：ゲイ；ナラティブ；文化；質的研究

問題と目的

1. 質的研究に基づく性指向でマイノリティとされる当事者理解

臨床心理学において、ゲイ、レズビアン、バイセクシュアル等の性指向でマイノリティとされる当事者を理解するにあたり、質的研究が数多く行われてきた。いくつかのセクシュアルアイデンティティ発達モデルの研究は著者自身のカウンセリング経験から理論生成を行っており(Cass, 1979; 堀田, 1998)、性の流動性を提唱したDiamond (2000)も複数の当事者への経年的なインタビューに基づいていた。性指向以外のアイデンティティとの交差性に着目した複数の研究もインタビュー調査に基づいて行っている(Johnson, 2000; Savin-Williams & Diamond, 2000; Shapiro, Rios & Stewart, 2010)。本邦でも、近年まで種々の質的研究に基づく当事者理解が行われてきた(梶谷, 2008; 枝川・辻河, 2010, 2011a, 2011b; 宮腰, 2012, 2013; 高藤・岡本, 2017, 2019)。臨床心理学の分野で性指向でマイノリティとされる当事者を理解するために、質的なアプローチはよく用いられるものであるといえる。

性指向でマイノリティとされる当事者の理解に質的なアプローチが用いられる重要性について言及した文献がいくつかある。まず質的研究は量的研究ではできない人間の複雑性、多声性を捉えることが可能である(Biggerstaff, 2014)。性指向でマイノリティとされる当事者理解に限ったことではないが、当事者のリアリティを汲みとるためにも質的なアプローチの重要性が窺える。さらにHammack, Mayers & Windell (2013)は、セクシュアルマイノリティ、レズビアン、ゲイ等のカテゴリーで研究されていた時代から、主体が尊重される時代になってきたことを理由に、個別性を尊重し、質的研究を蓄積する重要性を主張した。Cohler & Hammack (2009)は複数のナラティブ研究をまとめ、従来の研究にはない当事者理解が行えたことを述べている。このような多様化の時代背景を理由に、改めて質的なアプローチを行う重要性が窺える。

質的研究の中でもいくつかの種類があるが、調査方法自体の影響を考慮し個別性の高い質的研究を行う有用性が窺える。Biggerstaff (2014)は、質的研究の中でも協力者や語りを類型化するような研究の場合、明瞭な結果は得られるが具体性を欠く可能性や、多声性をすくえない可能性があることを主張した。

特に質的研究では、インタビューの場やインタビュアーとの相互作用等、調査方法自体の影響は避けられないため(James & Jaber, 1995/2005; Biggerstaff, 2014)、その影響に配慮してデータを解釈することも必要になってくる。しかし複数人を調査対象とする質的研究の場合、豊富なデータの存在や語りを類型化するプロセスによって、調査方法自体の影響の記述が薄くなり不明瞭になる可能性がある。不妊女性の研究を行なった竹家(2008)は同様のことを述べ、調査対象者を1名に限定し、James & Jaber (1995/2005)を参考にインタビュー自体の影響にまで着目して語られた内容の分析と考察を行った。James & Jaber (1995/2005)は、生成された語りは常にインタビューの文脈に依存するため、インタビュー手法、質問を固定的にするよりもその文脈依存性を自覚し、なぜその語りが生成されたのか、インタビュー自体の影響にも積極的に着目して考察する方向性を述べている。竹家(2008)は特に、インタビュアーのやりとりを含めた語りの継起順序(Flick, 2007/2011; Rosenthal, 1993)、インタビューに頻出する「鍵になる言葉(桜井, 2005b)」, 語られた量(Rosenthal, 1993)に着目してインタビュー自体の影響も明示し、考察する分析方法を作成した。このような1人の当事者の語りから、調査方法自体の影響にまで着目し詳述する研究は、複数人のインタビューを扱う質的研究や量的研究では得られない視点を補うという意義があるといえよう。

2. インタビュー自体の影響を考慮したナラティブ研究

性指向でマイノリティとされる当事者理解の研究でいえば、枝川・辻河(2010, 2011a, 2011b)がインタビュー自体の影響を考慮したナラティブ研究を行った。ナラティブとは「広義の言語によって語る行為と語られたもの(やまだ, 2006)」を指し、多様性・多声性が尊重される(やまだ, 2006; 江口, 2001)。そのためナラティブ研究を行うことで複雑で多様な当事者の人生を捉えることができ、新たな知見が得られる可能性もあるだろう。また、文化や民族性によって当事者の体験も異なる可能性があるため(Loiacano, 1989; Chan, 1989; Fukuyama & Ferguson, 2000)、枝川・辻河(2010, 2011a, 2011b)の研究は、本邦で行われたという点でも重要な意義があったといえる。枝川・辻河(2010, 2011a, 2011b)は非構造化面接を用いて広く性指向について尋ねた。当事者は、転校した経験や父親不在と性指向の

関連や（枝川・辻河, 2010）, 家族の理解が得られない状況（枝川・辻河, 2011a）や学校教育の影響（枝川・辻河, 2011b）を詳細に話した。また枝川・辻河（2010, 2011a）はインタビュー自体の影響についても省察し、インタビュアーの質問やインタビューの場が設定されたこと自体が当事者の語りや人生にポジティブに影響を与えたことを述べた。語りの内容だけでなく、インタビュー自体の影響の考察も有益をもたらしたように考えられる。

枝川・辻河（2010, 2011a, 2011b）の課題としてこれまでの当事者研究との比較を行っていなかったことが挙げられる。どの程度個別の語りがあったか明かでなく、探索的研究としての価値や利益は下がるように思われる。また、先行研究との比較検討を行わない研究は当事者に被害を与える可能性もある。例えば、他者の影響を受け性指向が変更されることは困難であるという当事者への共通理解がある一方で（平田, 2014）、枝川・辻河（2011a）は上述した通り転校経験や父親不在と性指向に関連づけた語りを示した。ナラティブ研究では人は各々で出来事を結びつけ、意味づけることによって経験を理解すると考えられているため（Bruner, 1990/2016；やまだ, 2006）、その語り が得られたことは意義があったといえる。しかし比較を行わず、独自性のあることが示されなければ、過度に一般化される等の事態が生じ、当事者やその周囲に悪影響をもたらす可能性もある。利益を得て被害を最小にするためにも、これまでの当事者研究と比較して論述する必要がある。

3. 本研究の目的

以上より本研究は、性指向でマイノリティとされる当事者にインタビューを行い、そのナラティブとこれまでの当事者研究を比較しながら、自身の性指向や人生をどのように意味づけているか、個別的に理解すること、探索的に研究することを目的とする。また、インタビュー自体の影響についても考察を行う。

方法

1. 研究協力者

SNSを通して広く協力者の募集を行い、最初に協力が得られたAを本研究の研究協力者とした。Aは20代後半でゲイと自認していた男性（以下、A）であった。20代でゲイ男性であるということはAの一つのプロフィールに過ぎないが、20代ゲイ男性に対する研究は国内でも複数みられる（枝川・辻河, 2010；宮腰, 2012, 2013；高藤・岡本, 2017, 2019）。しかし、宮腰（2012, 2013）や高藤・岡本（2017, 2019）は複数人の語りを類型化しており、枝川・辻河（2010）の場合は当事者研究との比較を行っていない。そのような課題を補うことができるため、改めてAを研究協力者とし、先行研究との比較を行いながら個別的に詳述することは有用であると考えた。

2. 対象ナラティブ

X年9月～11月において3回実施されたインタビューの逐語録を用いた。協力者の身体的・心理的負担を配慮しインタビュー時間は1時間半までと設定した。また面接回数もAとのスケジュールの調整の結果3回という上限が設定された。概ね1ヶ月間隔でインタビューを実施した。

3. インタビュー実施場所

筆者が所属する相談機関の面接室にて実施した。

4. インタビュー方針

非構造化面接を用いた。具体的にはFlick（2007/2011）を参

考に＜Aさんはゲイであることについてどのように思っていますか。その思いに至るまでどんな人生の物語を進まれたかお話ししてください。生まれたときや小さいころからお話しいただければ良いと思いますが、あなたにとって大切なことならなんでも、ご自由に、ゆっくりとお話してください。＞と最初のみ教示し、その後はやまだ（2007）を参考にし、語り手に主導権を持ってもらえることを意識した。

5. 筆者・インタビュアーの属性

インタビュアー（Int.）は筆者が行った。Int. は20代前半の臨床心理学を学ぶ大学院生であった。

6. 分析方法

竹家（2008）に倣った分析を行った。具体的には、以下の方法によってナラティブの再構成と経験の意味づけを行った。

- (1)逐語文字化したデータを精読し、全体としての形を見失わないように注意し、全体の語りの流れをみた。物語を生成的で未完なものとして捉え、物語における意味的連続性を重視しながら「物語世界（桜井, 2005a）」「ストーリー領域（桜井, 2005a）」双方について構造的にみた。
- (2)語られた順番、特に聴き手と語り手の共同による継起順序の流れをみた。
- (3)語られた量と語りの種類に着目し、語り手の人生の「鍵になる言葉（桜井, 2005b）」を見いだした。
- (4)「筋」に基づく現実に基づいた年表を作成した。
- (5)「ストーリー領域（桜井, 2005a）」、即ち評価や態度などの語りに注目し、経験の意味づけを分析した。
- (6)協力者のナラティブを再構成し解釈した。

7. 倫理的配慮

本研究は、研究協力の任意性と撤回の自由、個人情報保護、データ及び研究結果の開示方法について、書面、口頭で説明し、研究協力に同意を得た上で実施した。また、筆者の所属する研究機関の倫理委員会の審査を通過した。

結果

1. Aの年表

Aの年表を表1に示す。Aはインタビュー開始時、20代後半のゲイと自認する男性であった。家族は祖母、父、母、兄、妹で、幼稚園から大学院まで進学し、その後は非常勤で働いていた。

2. Aのナラティブ

分析から得られたシーケンスを図1に示す。図1はあくまでもシーケンスの緩やかな流れを了解するために可視化したものである。以下、図1に沿って経験の意味づけをする。語られた順序は図1の通りであるが、語られた内容が何回目のインタビューのものであったかは本文中に明記する。またインタビュー自体の影響も考察するため、表2に実際の逐語録も一部

表1. Aの年表

0歳	A誕生 家族構成：祖母、父、母、兄
3歳	Aの妹誕生
6歳	幼稚園卒園・小学校入学
12歳	小学校卒業・中学校入学
15歳	中学校卒業・高校入学
18歳	高校卒業・大学入学、単身生活開始
22歳	大学卒業、大学院入学
20代現在	大学院卒業、非常勤勤務

提示する。語られた量は、トランスクリプトの総行数に占める各シーケンスの行数の割合で算出し、図1に示す。最も総行数が多かったのは“(1)男性への性指向に影響されていない頃の話”で、37%であった。以降、Aの言葉は『』、Int. の言葉は<>で示す。

(1)男性への性指向に影響されていない頃の話(1回目インタビュー)

Aはまず小学5年生のときの友達のことを語った。『思い返してみればタイプだと思う』が、女性を『普通』に好きになることができ、同性愛感情に関する知識もなかったため、『影響がなかった』と話した。高校に入ってから、携帯を入手し友人が話していたワードを調べ『同性間の知識』を得たと語った。この

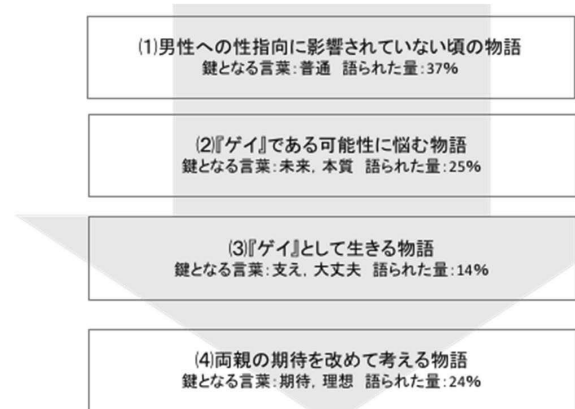


図1. Aの物語のシーケンス

頃もAは、自分がバイセクシュアルであると認識しつつも、結婚といった世間的な『普通』に生きていけるものと評価し、自身の性指向をあまり意識していなかったと語った。Int. が結婚を望んでいるのか尋ねると、『古い考えの家』の考え方に影響を受けていたことや世間から認められる一つのものであると、結婚に対する態度を語った(表2語り1)。またその態度は現在もあると話した。

(2)『ゲイ』である可能性に悩む物語(2回目インタビュー)

周囲が異性とキスやセックスをする一方、Aにとってそれは『頑張らなきゃいけない』ものであり、そのことを『おかしい』と友達に言われたAは、セクシュアリティに関連する本を読んで確かめようとした。そこで自分が同性愛者である『確証』を得ると、想像していた『未来』と『認めたくなかった』同性愛感情のある自分の『本質』との間で悩み、想像していた『未来』に生きたい思いがあったと、その出来事に対する態度を語った。また、想像していた『未来』とは、結婚や出産と行った『固め』の家で言われ続けていることであることも話した(表2語り2)。

(3)『ゲイ』として生きる物語(2回目インタビュー)

『ゲイ』である可能性に悩んでいたAは、同じ大学にいるゲイと自認する先輩に出会った。抵抗なくAも性指向を開示し、話すことで心の『支え』を得たと話した。その先輩のつながりで、Aはさらに他のゲイの人とも会うようになった。様々な人との出会いから、『ゲイ』であることに『負の感情』があったものの、『大丈夫』と思ったことを語った。

(4)両親の期待を改めて考える物語(3回目インタビュー)

親の期待や理想について応えたい気持ちがあったことを3回

表2. Aのインタビューのトランスクリプト

語り1	Int: んー、何て言ったらいいんだろうな。結婚にどのような思いを抱いてるんですか。 A: …当時結婚、まあなんか古い考えの家なので、その一育った家が。しょっちゅうその結婚、結婚相手は、地元で見つけるんだよ、とかそういう話をされてたんですよ、…世間的に、も、なんでしょうね、その関係が認められる、じゃないですか。うん、なので、それがこう恋愛のもののゴールとしては結婚をやっば考えてたんだろうな、と。
語り2	A: …結婚とか子育てとかっていうところは、なくなる、じゃないですか。ていうの、不安? その就職まではいいけどその就職した後僕はどなるんだろう、みたいな。ていう Int: ちょっと先の未来を考えて生きている。 A: はい。 Int: で、その結婚とか出産とかを、は、もうちょっと先の未来であった。 A: はい。 Int: それが目標になってたんですね。 A: そう、それが目標になってたの。 Int: その目標に、設定した? A: はい。 Int: 設定せざるを得なかった? した? しなきゃいけなかった? なんで、 A: で、した、でいいのかな。 Int: した A: はい。うん。 Int: うん。した理由とか聞いてもいいですか。 A: あー。まっ、実家、ちょっと固めの家なので、ずっと言われてたっていうのはあるんですけど、今も言われてますけど。
語り3	Int: …家族に勤められて、そういう状況にされるところに至って、至るときもそうなんですけど、至った後から、ここまで、どんな思いで過ごされてました? A: あー、でも、その両親が僕に期待してるってことっていうのは良く分かったたので、その一、まあ、特に母は、母もピアノを教えるんですけども、なんかやっばり、ピアノを続けてる息子の孫がちょっと見たかったていう、みたいな感じで言われたことがあるので、やっばな、なんていうか、両親が思ってた、ように育ってほしかったみたいな感じが、あったので、でそれもよくわかってたからこう、その間で、ちょっと悩んだような時期はありましたけど。でも、自分の中ではこの生き方が楽、なので、変えるつもりはなかった。
語り4	A: …自分ではこの、生き方がいいなとは思うかな? 思ってます。…あーまあ世間、世間にはそんなにまあばれないようにはしてますけど、その一、その一なんだけ、100%自分のまんまで、接する人がいたりとか、という状態に今いるのは、まあ心地がいいかな、と、うん。とか、思います。…生き方がいいなっていうか、この生き方もいいな、間違いないかな。 Int: うん。他の、生き方もあるかもしれない。 A: …まあ別にその一、まあ親と話して、話したからってわけじゃないけど、その親が理想としての生き方に、自分をあてて、生きるのも、別に、そんなに、悪くはないな、とは今は思ってます。まあ結局その、ゲイである自分は、隠すことにはなるんでしょう、けど、それはそれで、いいのかな。前はものすごく嫌だったんですけど、なんか今はそれでいいのかなと。 Int: 今だから? A: うん、まあものすごくなんか、自分、それは自分じゃないと思って、それは自分の今思ってる感じには、反する。な、って思ってそれは嫌だ、って思ったんですけど、ちょっとたぶん柔軟になったのか、なんかそういう生き方もアリだなーとは思ってます。
語り5	Int: で、今考える女性との結婚っていうのは、なんなんですか。 A: …今になって、みると、完全に受け付けられないわけではない、んですよ。たぶん女性との、セックスのことを、…それも、可能だろうな、ぐらいな感じですかね。 Int: まあそれも、セックスも含めて、精神的に、肉体的? まあ性的な、んー、可能なんだろうな、って思ったのはどこらへんですか。 A: …やっぱりかわいい女の子を見ればかわいいなって思うし、ハハハ、うん。なんか、その一、やっぱり好みの、女性とかもいるんで、っていうと怒られるんですけど、彼に、…うん、なので、なんか、そう、結局ゲイなのか、バイなのか、みたいなところにいますけど、この、結局タイプの男性もいますし、タイプの女性もいるんですよ。どっちもいるので、なんか、あんまり気にしないことにはしてますけど、自分、自分がどっちかっていうのをあんまり自分でも気にしないようにしてて、なんかそのときの気持ちに、正直に生きとこう、みたいな感じですね、うん。

注) A: Aの語り、Int.: インタビュアーの語り、…: 省略

目のインタビューでは主に語った。インタビュー時から約半年前に、ゲイであることを両親にカミングアウトをし、親の『期待』や『理想』である結婚について改めて考えたと話した(表2 語り3)。『期待』にこたえられず『悩んでた』一方で『この生き方が楽』で、変えるものではないとも語った。最後に、<今こう振り返って、改めてゲイであることについてどのように思っていますかね。>とInt. は尋ねた。Aは『親の理想にはめて』生きること、性指向を『隠すことにはなる』が、『柔軟になったのか』選択肢として入る機会であったと話した(表2 語り4)。また、自分の性指向を再考し、『タイプの男性もいますし、タイプの女性もいる』こと、『そのときの気持ちに、正直に生きとこう』と語った(表2 語り5)。

考察

本研究は性指向でマイノリティとされる当事者にインタビューを行い、そのナラティブとこれまでの当事者研究を比較しながら、自身の性指向や人生をどのように意味づけているか、個別的に理解すること、探索的に研究することを目的とした。また、インタビュー自体の影響についても一考察を行うこととした。以下、1. Aのナラティブ、2. インタビュー自体の影響、3. 総合考察—『古い考えの家』で生まれたこと—の順で述べていく。

1. Aのナラティブ

まずAのナラティブについて考察する。本研究では4つのシーケンスからAのナラティブを捉えた。それぞれのシーケンスごとに考察を行う。まず、(1)男性への性指向に影響されていない頃の物語である。Aは『タイプだと思う』男性がいたことやバイセクシュアル自認があったこと、一方で性指向による『影響がなかった』、『普通』に生きていけると思っていたことを語った。また、性の知識がなかったこと、女性への好意があったことがそのような評価や態度の語りの背景として語られた。セクシュアルアイデンティティ発達でいえばTroiden (1989) や石丸 (2001) が述べる、自認はないが性指向に敏感になる基盤を作る段階であったと考えられる。しかし女性への好意やバイセクシュアル自認がある場合、異性愛中心の社会に適応的である可能性があり、Cass (1979) やTroiden (1989)、石丸 (2001) のような典型的で単線のセクシュアルアイデンティティ発達モデルで当事者を捉えることは難しい場合もある(Reynold & Hanjorgiris, 2000; Zubernis, Snyder & McCoy, 2011)。『普通』で、性指向の『影響がなかった』とAが併せて語ったことを考えれば、上記のセクシュアルアイデンティティ発達モデルでは捉えられない語りであった可能性もある。また、『古い考えの家』や『結婚』の影響も語られた。このことに関する考察は後述する。次に(2)『ゲイ』である可能性に悩む物語である。Aは自分の『同性愛』の側面について『認めたくなかった』、『悩んだ』と語った。Aはこのとき、同性愛感情に気づきながらも否定、拒否的な思いなどを抱く「アイデンティティの混乱 (Cass, 1979)」の段階であったことが考えられる。また、ここでも『ちょっと固めの家』という『家』の語りがあらわれた。このことも後述する。

3つ目に(3)『ゲイ』として生きる物語である。『ゲイ』であることに『負の感情』はあるが『大丈夫』だと思ったと語った。この語りからこの頃Aは「アイデンティティの許容 (Cass, 1979)」の段階であったように考えられる。Cass (1979) が述

べるように、否定的な評価はしつつも、同性愛者である自己像はある程度確立し、ゲイコミュニティに接近していることが窺えた。

最後に(4)両親の期待を改めて考える物語である。この語りでAは性指向について様々な評価をした。『ゲイ』である『この生き方が楽』だが、結婚してほしいという『親の理想にはめて』生きることを選択肢に入ったこと、性指向を再考して男性と女性に『タイプ』があるから『そのときの気持ちに正直に生きていこう』と思ったことを語った。性指向に捉われない「アイデンティティの統合 (Cass, 1979)」の段階にいるようにも思えるが、『隠すことはなる』という言葉からネガティブな評価もしているように考えられる。さらには性が流動 (Diamond, 2000) しているような語りも得られた。これまでのモデルでは十分に説明できず、性指向の内在化が複雑であること、性指向への評価が混在しうることを示した。この語りは類型化を行う研究であれば捉えがたかったであろう。

セクシュアルアイデンティティ発達モデルの研究等ではなぜこのような語りが生成されたのか説明できなかったため、さらにその考察を深める。Aはここまで、性指向を評価した経験を様々に語ってきた。それらの経験が複雑な語りを生成した可能性は考えられる。特に影響を与えたことは鍵になる言葉にもなった家族や親の『期待』、『理想』であったことが考えられる。『古い考え』で『固め』の家だから結婚や出産を求められていたと、Aは1回目のインタビューから語っていた。Aの人生において重要な出来事であったと考えられる。それが『ゲイ』として生きることを『隠すこと』、『悩む』ことの一因になっていたが、『そのときの気持ちに正直に生きていこう』と比較的ポジティブで、様々な将来の可能性を残した語りにもつながったように思われる。家族の期待や理想については本邦の他の文献でもみられるが(枝川・辻河, 2011a; 宮腰, 2012)、Aはさらに『古い』、『固め』ともいっていることから、元来の文化的背景の交差も考えられる。Fukuyama & Ferguson (2000) によれば、アジア系アメリカ人は従来家族や地域ユニットが高い価値をもち、特に男系の祖先や世代間連鎖が強調される。そのようなアジア文化に対する言及とAの語りは類似しているだろう。すなわち、親の『期待』や『理想』に応えることは、『ゲイ』であるAにとってはネガティブな出来事だが、その文化の元に生まれたAにとっては適応的でポジティブ要素も含んでいたため、まとまることなく複雑な語りになったと考えられる。Fukuyama & Ferguson (2000) はアジア圏の当事者研究ではなくアメリカ人を対象とした文献研究であり、本邦の当事者研究でアジアや日本文化との交差に着目した研究はほとんどない。そのため、Aの個別性の高い語りであった可能性もある。

2. インタビュー自体の影響

次にインタビュー自体の影響を考察する。特に本研究の特筆事項として考察した(4)両親の期待を改めて考える物語等の語りに対するインタビュー自体の影響は省察すべきであるだろう。そのような特筆事項に着目したときに考えられるインタビュー自体の影響は、2点挙げられる。まず教示についてである。Int. は<生まれたときや小さいころからお話いただければ良いと思いますが>という言葉を用いて教示を行った。家族や地域での関係性が中心であった幼少期や児童期を想起させ、そのような語りが生成されやすくなる基盤を作ったことが考えられる。

この影響は、インタビューの始めから『古い考え』の家という語りを生成していたこと、ナラティブ全体として概ね生まれたころから順序よく語られたことから示唆される。

2 点目に Int. が結婚や家族形成に積極的関心を示したことである。(1)男性への性指向に影響されていない頃の物語という、家族や友人等その地域に基づく経験が、語りの量として最も多かったことから、Int. も積極的にやりとりを行っていたことが考えられる。また、(4)両親の期待を改めて考える物語で鍵になる言葉が『理想』や『期待』になったこと、実際のトランスクリプトにおける Int. の言葉(表 2)をみても、Int. が結婚、親の『期待』等、家族が関係する語りに関心を持って尋ねていたことが分かる。Int. は20代という青年期から成人前期の年代であった。結婚や家族形成が発達課題となりうる年代(Havighurst, 1972/1994)であったことが、積極的に関心をもったことに影響を与えた可能性も考えられた。

3. 総合考察—『古い考えの家』で生まれたこと—

ここまで A のナラティブと先行研究を比較しながら、当事者が自身の性指向や人生をどのように意味づけているか、個別的に理解しようとしてきた。A の語りは先行研究で説明できることも多かったが、説明の難しい複雑な性指向に対する語りも得られた。本研究が個別性を重視したからこそ、このことを示せたように考えられる。A は様々な経験を経て複雑な語りを生成したと思われるが、『古い考え』で『固め』の家に生まれ、結婚等を『期待』されたことがその影響として大きいように考えられた。A のそのような語りはアジア文化圏の特徴(Fukuyama & Ferguson, 2000)と類似していた。すなわちそのような『期待』に応えることは、『ゲイ』自認を持つ A にはネガティブに影響を与えたが、その文化のもとで生まれた A にはポジティブに影響を与えたため、A 自身の評価や態度はまとまることなく複雑な語りになった可能性がある。一方で、Fukuyama & Ferguson (2000) はアジア系アメリカ人を対象としており、本邦で地域性や文化性に着目した研究はほとんどない。そのため、A の個別性の高い語りであった可能性もある。

また、インタビュー自体の影響についても考察した。上述した本研究の特筆すべき語りが生成されたことには、教示や、Int. が結婚等の家族が関係する語りに積極的に関心を持ったことが影響として考えられた。

今後の課題として 2 点挙げる。まず他の当事者への研究の蓄積である。本研究ではアジア圏の文化的背景をもとに論述したが、同様の言及を行った文献はほとんどない。また、アジア圏にも様々な文化が存在し、例えば転居等を通し、他の文化圏の影響を受けながらアジアに在住する当事者もいるだろう。さらにはアジア圏の影響と併せて、男性というジェンダーアイデンティティや、年代の影響を受けていた可能性も考えられる。文化差、ジェンダー差、年代差等、本研究で得られた視点から別の当事者にインタビューを行えば、さらに多様な語りが生成される可能性がある。同時に、類似点を見出し当事者の経験の傾向を把握できる可能性もあるだろう。2 点目に他の方法を用いた研究の蓄積である。個別性の高い質的研究と同様に、他の研究方法も重要である。特に、当事者の傾向を把握し一般化を目指す場合には、本研究以外の研究方法が用いられる必要があるだろう。さらには、インタビュー自体の影響も考えられたためそれらを踏まえて新たな研究を展開することも方向性として考えられる。

文献

- Biggerstaff, D. (2014). *Qualitative Research Methods in Psychology*. Rossi, G. (Ed.). Psychology: Selected Papers. Intech Open. pp175-206. <https://www.intechopen.com/books/psychology-selected-papers/qualitative-research-methods-in-psychology> (2020年7月4日取得)
- Bruner, J. M. (1990). *Acts of meaning*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子(訳)(2016). 意味の復権〔新装版〕—フォークサイコロジーに向けて—。ミネルヴァ書房。
- Cass, V. C. (1979). Homosexual identity formation: A theoretical model. *Journal of Homosexuality*, 4, 219-235.
- Chan, C. (1989). Issues of identity development among Asian-American lesbians and gay men. *Journal of Counseling and Development*, 68, 16-20.
- Cohler, J. B., & Hammack, L. P. (2009). Lives, times, and narrative engagement: multiplicity and meaning in sexual lives. In L. P. Hammack, & J. B. Cohler (Eds.). *The story of sexual identity. —Narrative perspectives on the gay and lesbian life course*. Oxford: Oxford University Press, pp. 453-456.
- Diamond, L. M. (2000). Sexual identity, attractions, and behavior among young sexual-minority women over a 2-year period. *Developmental Psychology*, 36 (2), 241-250.
- 枝川京子・辻河昌登 (2010). ある LGBT 青年の語りからみるナラティブ・アプローチの意義。発達心理臨床研究, 16, 117-127.
- 枝川京子・辻河昌登 (2011a). LGBT 当事者の理解にナラティブ生成が果たす役割。心理臨床学研究, 29 (1), 85-96.
- 枝川京子・辻河昌登 (2011b). LGBT 当事者の自己形成における心理的支援に関する研究—ナラティブ・アプローチの視点から—。学校教育学研究, 23, 53-61.
- 江口重幸 (2001). 精神科臨床になぜエスノグラフィーが必要なのか。坂井明夫・下地明友・宮西照夫・江口重幸(編)。文化精神医学序説—病い・物語・民族誌 (pp19-43) 金剛出版, pp19-43.
- Flick, U. (2007). *Qualitative Sozialforschung*. Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verla.
- 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子(訳)(2011). 新版質的研究入門—<人間の科学>のための方法論。春秋社。
- Fukuyama, M. A., & Ferguson, A. D. (2000). Lesbian, gay, and bisexual people of color: Understanding cultural complexity and managing multiple oppressions. In R. M. Perez, K. A. DeBord, & K. J. Bieschke (Eds.). *Handbook of counseling and psychotherapy with lesbian, gay, and bisexual clients*. Washington, DC, US: American Psychological Association, pp. 81-105.
- Hammack, L. P., Mayers, L., & Windell, P. E. (2013). Narrative, psychology, and the politics of sexual identity in the United States: From 'sickness' to 'species' to 'subject'. *Psychology & Sexuality*, 4, 219-243.
- 平田俊明 (2014). レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル支援のための基本知識。針間克己・平田俊明(編)。セクシュアル・マイノリティへの心理的支援—同性愛、性同一性障害を理解する—。岩崎学術出版社, pp. 26-38.
- 堀田香織 (1998). 男子大学生の同性愛アイデンティティ形成。学生相談研究, 19 (1), 13-21.
- Havighurst, R. J. (1972). *Developmental tasks and education*. New York: David McKay.
- 児玉憲典・飯塚裕子訳 (1997). ハヴィーガーストの発達課題と教育。川島書店。
- 石丸径一郎 (2001). マイノリティ・グループ・アイデンティティ—人はいかにして自らに付与された差異を取り扱うか—。東京大学大学院教育学研究科紀要, 41, 283-290.
- James, A. Holstein, & Jaber, E. Gubrium (1995). *The active interview*. California: SAGE Publication.
- 山田富秋・金子一・倉石一郎・矢原隆行(訳)(2005). アクティヴ・インタビュー—相互行為としての社会調査—。せりか書房。
- Johnson, C. W. (2000). Living the game of hide and seek: Leisure in the lives of gay and lesbian young adults. *Leisure*, 24 (3/4), 255-278.
- 梶谷奈生 (2008). 女性同性愛者のセクシュアリティ受容に関する一考察。心理臨床学研究, 26 (5), 625-629.
- Loiacano, D. K. (1989). Gay identity issues among Black Americans: Racism, Homophobia, and the need for validation. *Journal of Counseling & Development*, 68 (1), 21-25.
- 宮腰辰男 (2012). セクシュアルマイノリティを生きるということ—同性愛者がセクシュアリティを受け入れるプロセス—。大正大学カウンセ

- リング研究所紀要, 35, 63-77.
- 宮腰辰男 (2013). セクシュアルマイノリティを生きるということ—カミングアウトとコミュニティをめぐる危機と回復について—. 大正大学カウンセリング研究所紀要, 36, 39-52.
- Reynolds, A. L., & Hanjorgiris, W. F. (2000). Coming out: Lesbian, gay and bi-sexual identity development. In R. M. Perez, K. A. DeBord, & K. Bieschke (Eds.), *Handbook of counseling and psychotherapy with lesbian, gay and bisexual clients*. Washington, DC: American Psychological Association, pp. 35-55.
- Rosenthal, G. (1993). Reconstruction of life stories. Principles of selection in generating stories for narrative biographical interviews. *The Narrative Study of Lives*, 1 (1), 59-91.
- 桜井厚 (2005a). ライフストーリーインタビューをはじめる. 桜井厚・小林多寿子 (編). ライフストーリーインタビュー質的研究入門. せりか書房, pp. 11-61.
- 桜井厚 (2005b). インタビュー・テキストを解釈する. 桜井厚・小林多寿子 (編). ライフストーリーインタビュー質的研究入門. せりか書房, pp. 129-208.
- Savin-Williams, R. C. & Diamond, L. M. (2000). Sexual identity trajectories among sexual-minority youths: gender comparisons. *archives of sexual behavior*, 29 (6), 607-627.
- Shapiro, D., Rios, D., & Stewart, A. (2010). Conceptualizing lesbian sexual identity development: Narrative accounts of socializing structures and individual decisions and actions. *Feminism and Psychology*, 20, 491-510.
- 高藤真作・岡本裕子 (2017). 青年期の男性同性愛者・両性愛者の性的目覚めから性的指向の開示に至るプロセス. *心理臨床学研究*, 35 (3), 297-303.
- 高藤真作・岡本裕子 (2019). 青年期・成人初期の男性同性愛者の同性愛嫌悪の内在化とその変容の検討. *心理臨床学研究*, 37 (5), 468-480.
- 竹家一美 (2008). ある不妊女性のライフストーリーとその解釈—「不妊」という十字架を背負って—. *京都大学大学院教育学研究科紀要*, 54, 152-165.
- Troiden, S. S. (1989). The formation of homosexual identities. *Journal of Homosexuality*, 17, 43-73.
- やまだようこ (2006). 質的心理学とナラティブ研究の基礎概念—ナラティブ・ターンと物語的自己—. *心理学評論*, 49 (3), 436-463.
- やまだようこ (2007). ライフストーリー・インタビュー. やまだようこ (編). *質的心理学の手法 語りをきく*. 新曜社, pp. 124-143.
- Zubernis, L., Snyder, M., & McCoy, V. A. (2011). Counseling lesbian and gay college students through the lens of Cass (and Chickering's) developmental models. *Journal of LGBT Issues in Counseling*, 5, 122-150.

A narrative of a 20s gay man born in an 'old fashioned house'

Masashi TANAKA

Department of Human Sciences, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

Numerous qualitative studies have been conducted to understand sexual minorities, but further individualized research is necessary to capture the complexity of this group. In Japan, narrative studies have been conducted on a single person. However, the individuality of these narratives is unclear because they have not been compared with previous studies. In this study, a gay man (A) was interviewed and their narrative was compared with previous studies to understand the meaning of his own sexual orientation separately. As a result, there were complex narratives toward sexual orientation that are difficult to explain in previous studies. One of the influences on the generation of this narrative could be that he was born into an 'old-fashioned' house and was 'expected' to marry. This narrative was similar to that of the Asian culture (Fukuyama & Ferguson, 2000). Because meeting these "expectations" negatively affected their self-identified as "gay" but positively affected their identity being born in that culture, the evaluations and attitudes were complicated due to the lack of coherence. Since there were few references to the influence of culture in Japan, A's narratives may have been highly individualized. Thus, further research on the narratives of sexual minorities is needed.

Keywords: gay; narrative; culture; qualitative study